

公益の風 #16



東北公益文科大学大学院
公益学研究科修士課程1年
東山 昭子

令和4年4月、私は東北公益文科大学大学院修士課程に入学した。

母は97歳で、呆けることもなく、曾孫相手に毎日を時々は他愛のない口論を楽しみながら、元気に亡くなった。驚くほど美しい死に顔だった。彼岸で待っていてくれる誰かを思い浮かべながらの旅立ちと思えた。人生百年時代と言われるが、97歳となれば知友の大方は先立ち、「若い友達をつくっておきな」が口癖であった。母から娘のみ伝わる遺伝子があると教えられたが、周りに誰も知る人のない世界は考えられない。今日行くと今日の用事で若い方と繋がる、が志望の一つであった。

「老いて学ぶ喜びー地域共創の明日をデザインしながら」

子たちは、厳しさの増すこれからの人生をどのように生き抜いてゆくのだろう。見ず知らずの庄内に赴任した当初、ここは極めて閉鎖的な、頭のてっぺんから足元まで、何度も確かめなければ、同じ場所で暮らす人とは認知されない排他性を含まれていた。2000年は変わらないうと予測したが、見事外れた。僅か64年の間に、地殻変動が起こったかのよう「下を者、ばか者、わか者」と呼ばれた人々への寛容さは広がり、気が付けば、城下町で自分の考えを表だして語っているのは他所からここへ来て、根付いてしまった女性が多いように思われた。ここに生まれ育った方々の、深く内に蔵して的確に動ける持続性のある活力は、地域をしっかりと支えながら、前面には出て来ない。以前、お土産品を選定する委員会のメンバーが、全員男性であるのを地元新聞で見た時、この地の変わらなさを見た。政策決定の場に、この地で生きる、自分より若手の女たちを立てなければならぬという想いが強まった。この地の私たちの足跡に、その歴史的文化的学問的な跡を探れないか、女が女を語る大切さを話し合い、今はなくなった「NHK庄内

文化センター」設立の平成3年から、兼任講師の許可を得て、現職のまま「ふるさとの女たち」の講座を開講した。女たちが壁に当たり、落とし穴に落ちた時、歴史に学び、振り返ることの出来る一冊を贈りたい。輝いて生きてきた女たちを思った。更にはコロナ禍で、業務が多端となり、社会人入学者の減少で大学院の経営が難しいとの噂に、ささやかでも、学術文化都市の継続と大学の公立化を繋ぎたい個人的な想いもあった。

入学して思うのは、教授陣の真摯さである。私自身、身を正せられる研究への熱意と、新しい指導法に基づく広範囲な最新の情報までを畳み込んで、出典を明示した資料の提示がなされる。世界的な文献の提示が多いので、翻訳文も多いがようやく慣れてきた。日本文学畑で、それも情緒的に柔らかすぎる頭脳しかない自分には、多少難しいところがあるが、系統的にあんなこと、こんなことが体系づけられる楽しさは予想以上である。今はIT機器が自由でない遅れを、どうにかしたいと対策を練っている。若い方々の支援はここでも絶大に有効である。テーマに沿って自在にグループが組まれるので、その仲間がしっかりフォローしてくれる。生きてきた経験は、三倍も四倍もあるので現実を観る眼の補完は手伝える。多少のきつさはあ



大学院入学式にて 同級生と

「敬天愛人」2022年10月号 Vol.163掲載（庄内日報社発行）